羇濃
奮衣

八丈綺談

伍

特別
へ13
3646
5

へ13
3646
5

美濃舊衣八丈綺談 巻之五

東都 曲亭馬琴編演

艮為山

あるこの駒ノ下

却説岐義はおつぎと母親間柴より伴なひて次の日羽栗の郡なる復塚へ還る途よ。宿をづりに白屋の門ちや近くうりしらぶ濁水へ猛く出迎へく馬の絆綱を牽まで。欵ぶと限るうく。ぶまちのくせてとけよといふおいざりけるよ。ちでを還るうひと。官待態も正首よ。覓の水紙流しかけく姨と岐義ふ足を洗せもづく駄荷紙とり入れうく遠く汲く出て茶を煮るうぬん操に今下ルのをいませどを岐義はお駒を伴よく。走ろんとおひそのの夜れるの顛語る腹立ちよ。笑ひうけても抱いつぞ當下間柴は濁水よ對ひく。ひよりの徘易く。岐義をを得てくうる。白木屋の首尾おちをなく。昔をうをいつど

38-3435

まろ程よ。近鄰さ莊客ども聚ひ来ゝ。岐義が里ゞゝを視せてゝ親間柴折と
ゐて。忽地ゆゝしう。曩ゝ岐義が白木屋弐出ゞてよりこゝ情曲ありぬべき
ゝ。見弐竊こて。樽井赤坂の傀儡女ゝ談ゝ
さとて曉ぞやあるゝん。こゝとゝ又ゝゝ渠ゝゝ家ゝゝてゝゝ野ごゝの
矢ぞとあらぶ親がひとゝ弘劬勞にて結句人ゝ矣ゝゝ翌ゝもまこゝ今
霄只澳水とゝゝまるゝ足械ゝゝとゝゝゝ決めつ。
莊客ども固生ゝく。茶弐啜る窓のゝゝ岐義と澳水をゝゝゝ
あゝゝゝく澳水が親の送言弐說ゝゝ汝達今霄婚姻の盃弐せゝとて
後ゝまでのゝゝ叮嚀ゝゝひ喻ぜば莊客ども笑て岐義が回答弐ゐも
まゝぞゝ一度のゝふゝゝゝけゝ日子ゝゝ世ゝ差ゝく在ゝとゝゝゝ。
人ゝ伝ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝの雜魚平が蹟ゝ蔑ゝゝゝゝ儲ゝゝゝゝ

あゝ蓬莱の松ゝ門ゝあゝ。常世の竹ゝ背門ゝあゝ。盃のゝゝ山海ゝ珍味ゝほて
ゝ不愛ゝ。吾倅媒妁つゝゝゝゝん鋤四郎ゝ曲突ゝ焼け。抜太郎ゝ酒屋走ゝ
序ゝ豆腐ゝ忘ゝゝゝ寔ゝ千秋萬歳の千皆ゝ王子ゝゝゝあゝ。ゝゝ究
竟の殼ゝゝゝゝ戴ゝゝ憑ゝく。庖湢のゝ弐助ワゝゝゝ岐義ゝ推辭ゝ云ゝ
かく。澳水ゝ見ゝゝゝゝゝ何ゝゝゝゝゝ胡乱ゝゝ散動ゝ彩ゝゝく日弐暮
ゝゝ莊客ども執持つ。婚姻ゝとり徘ゝく。まゞ新夫婦弐ゝ房ゝ全更闌ゝ
ゝゝ醉弐盡ゝく。夜ゝゝ共ゝゝゝゝゝ口ゝゝゝゝ間柴ゝ子ゝゝゝ婚姻ゝ
整ゝく。十七年の患難劬勞を昔ゞゝゝとなゝゝゝゝ重荷弐ゝゝゝ
地ゝ。豫ゝゝゝゝ人の為ゝ。坂東三十余个所なる。観世音の灵場ゝ巡礼の
志願あゝ。特ゝ今茲ゝ復市ゞ十あゝ七回の忌日さゝむゝゝゝゝゝゝゝ
跡止ゝゝき。拾ひゝ金乃半のゝ。田質ゝ大ゝゝ清復せゝゝゝ。ゝゝゝゝ隈ゝ

う。西三年来ハ世乱浪風を静まくやうゝ伴侶をあるゝ見とゞ。と只
管おのゝ〻ゝ随ふ。聽く徘乃頭紙岐義澳水ホよ視ゝし。猛よ岳よ
禪衣ゝと行装を整つ。同郷鄰里乃老夫婆ゝホとゝうつを立て首途
せり。さるゝ程よ岐義ハ便宜を失ひ。已ゝ紙ゆゞ八重葎。繁る宿ゝ
ゝ。澳水を妻ホ〻ゝをゞゝとゞゝ。ゝ忘ゞゝて只歡ゝと楽
まゞ。丈ハゞ取ゝしゝる。お駒ゞ艶簡と八丈の袿を紀念と壁よ貼屏風よ
かけくゝうち瞻め。世ゝハ罕なる宝といふ燕の子安貝ゝうを。龍れ腮の玉ゝを
ゆゞゝ紙ハこの玉章なり。ゝをゞゝくべなゝうゝ紙春蚓秋蛇のゝゝを書つく
遍ゝをを目がを。ゝをゞ。ゝひ深ゝる黄絹の。衣乃摸様の蝶ゞゝを。花ゝ紙
枝ゝハ宿ゝぬ。ゝの紙ゝゞゞ過世のゝろけゞゞ。小町紙ゝて〻醜女を使ひ。
伽羅と擲く糞土紙抓む。この抛ものひとゝろゝやゝゝん。憑失ぬうゝゝり

香のゝゝゝぬゝ絆ゝとゝて。壌臭く日南臭き。澳水が面をゝんゝゝを。
とゝゝゝゝじく彼君ハゝゝゝ恨ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
告るゝゝゝ紙君ゝゝゝ。聞ゝゝゝゝる関川ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ水脈ゝゝゝゝゝゝゝ
約束ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

肩腰の嫌ひなく。打倒さを蹂躙らる。日毎の呵責は四鄰と騒じ。いと苦しきものゝ妻子。さらを漁水仂るゝ。打る隨は爭ひど。有一日良人は對ひていへ。

やう。嫌るとゝ云くつをこゝより外は里もなく。生て甲斐なき家ゆゑ。熟は

賞緣くゝ。ん月は抜ゝおりゝとる。悪緣といふは。せん。後は。どうとて稼きとう。云

呼らるとゆふとを閨の小川の親方は。勤て在せゝとの年来迷はゝひそゝる。異

妻のあるゝ。べよりや母の命でを左まを右をを假托ゝ。さてあるべきふ。

稱ぬゝとゝ云ゝ衣のゝとゝ凡自いなる妻ゆゝ。その夜だろうのうを情果を

ゝゆびれの霧の海。ゝひ沈ゝくゝとく死後しゝとゝいゝぬだろうは打罵は。飽まで強

顔き夫でを夫とゝゝべ憎ゝとゝぞ抜ゝ云えかぬゝとゝゝぶ目ゆを家畜は掛ゝ

本ゝるとゝ。南宮山の神祟より。ゝゆれゝるゆゝ巻ゝ。ゆゝゆゝゆゝ情由である。

艶間ゝゝより水芦の沙れ裂ゝ秋黄昏の。衣ゝ主ゝそゝゝ人ゆをゝとゝて

姫くそいよまあらどいはる日うつあんへーとろ。うへのそとゆく田よ畑れ様も絶て
ものはるとど。居つ食うぶ山を竭うえ豫ぞちらぶ柵となりて毋戒屋人めを。
棚ゐ〜舟の楫ろをうれ取うえれ良人の機嫌かう嶋うれ者へひとろ。ひとろの
苦〜さ式孫家の名乃家だろを哀ひとろ。外〜ひくす書車輾び
易さうとぶゆるぬ夫の乙式精ときぶ化〜野上の宿拉君路の柳よ播乃花も
折る人ゆ靡りどを松乃樣へゆるぞちとぬ。みる偽アの艶治色よ蕩うと赤限も。
頃ひく奈を搖井の傀儡を醒てえ悔〜きめどとよいと程〜れえ親の為家の
為又刃の為ぬ意の駒を繋ぶ駐く只谷だろりでと女房というとるかひよ女
房の苦〜れ胄を休めてぶ鄙の田舎の薮そぐち。鑿柄とりて日ゑ黒む膚恥
ちれ新綿の糸猴あんど草野挿て結繋をさど紅粉つけど紫山子に似ろ
ろうふるとど神と親ぶ結びて。妹伎ハとの世のとなとど二世の縁〜と

伯父の武左衛門と云口説く。言葉の滅顕なる。松はまづ是の苦紅を深る
袂も腸を絞るだろ。水泡なるか。寔は漆言耳は逆ひ良茶は苦し。政義は
こは武ゆびあくと。唾を吐しく眼を瞪りしもぐらう。口説くに元来母は親族
でと家は後ぶ親の嘖。些の痩田を山反ばかり。指揮へて侮る先づ只醫は
布きんや。抑この手間を何をろうくるやうの衣ぐるでで憎き向ひは今ぬ
仇姫ふ。仇腹立くて行ぐるのきこうる目はあとど一字一文引をせど流も
なるを。実は後がいとぐ。宗旨の祖師の和尚丈ろ。なぐ紅ふとの筆は迹
五條七條の袈裟ろとうるそれはこの衣を戴ひ立地は瘧疾がもつるは些
移香は類と。件の袿を投被げく。勢ひ猛くくもし間は。其処退ぞ。泣流せ。
澳水を撲地と蹴返ぜば。苦と叫ぶ我又をうてうもど。御を外面へ出るろ。さる袖は。
澳水は蘊る抱ひは。病細ぶるをそぐ人は。今は良人は打罵らるてく。恨ぬ

恨は胸塞ぐは心忽地乱をる人人とはぬは應つ。紙撃て貝紙睜り。壁は
数ひく呵とをもちを天ふと数回左右紙をろうて。肩はかりは八丈乃袿を
取く勝は乗し。現この衣は類らぶ。かくまで拙紙ひひせで。夫の好る京染紙。
いざ被てみんと忙しく。桃の舊衣脱捨く。お駒が衣紙をどけなく。前は死ぬと。
細帶我左へ結びる左へ褄小服はとろくく莞爾と笑をかくまで仇うる打捨で。夫の
ところろうろうる人強顔き人は何処ぞ。是ぬ人ぞ。こを噛といと喋くろく咤
うけく。襖障子を推倒し。狂ふ乱の茶を髪門の柳を秋深く。花花落葉乃
夜の世は夢とを見人現うく。外面をく走り出て。往方へもとどなりぶ。
却説岐義は村を入れうは。友ぐちかり拉びてとしく。その瞳青は冷りてをぶ。
障子襖と潜あとて。何処ぬ入れん澳水へとくど。一旦の怒は乗し。不見示歩
出るとをぶそぐうう。ぬ。くそぐまふ外ふをどをびかくくを

ねぐらをとぶ。明るゝ比より屋棟より忌ぶ〻鳥を常とす。後ゝ鳴くかゝる来しかゝる。
とゝ鳴くかゝるとゝ鳴くとゝ。漁火より外にうるれめ。紙こゝ宿命紙は遂ざる。腹とゝしてる
打擲せし紙。陝き女子のゝ。ゝ。恨は怪ゝ走り迷ゝ。傍ゝ投ゝ。
渠ゝ。妻ゝ。平き家の女兒。母の旅寢の間ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

秋雨ふり川の水岌ゆきまさりて。その勢ひ箭のごく。特ふ夜川のことなれば。縦水地の達者なりとも。輙くこゆべきあらぬ。船よ筏よと罵りさわぐいとぶらふ。夜と明るまでしきりに五七日。下流遠く海猟まで。元来この川はその末大野郡ふ入りて。安八羽栗の二郡へ流れ。その一條ふ川鰭より。尾張岐阻川へ流れ落。又一條ふ合渡より。両三條ふ流れて。席田本巣山縣の三郡ふ跨がりて。復塚羽栗郡長良縣村黒野の里以上席田郡ふ帯ちて。かくふ昔ふ水服も今と異なる山川の水岌まさりて流れ。石紙滾を勢ひあるまでに。お駒が死骸はその夜の中ふいづくの里ふ推流されんそまでおりふ夜と沼ふそまでさまよひ捨ぐてくれ。彼此を寄る波ふ。十月の上浣ふなりつかくて水落。流ふ見る。関川よりいと迫なる。合渡川のところの岸ふ茨ふかる亡骸あり。と生るるめくあり。しばらくまでそこ。渚平ホハその処へ行て。岸ふ裏ひくつるふ投てよりて。さや日ごろ強くまで皮

壊まで。只烟まで。臭東量紙穿のこ。見ぞを。後ふ。黄疸の涙をなる。八犬須の袖の袖紙。ぬるまでぬ。後へ。ぬるとあくぬる。ぬる駒ふ。殘忍貪慾人ふ超る。渚平すまでと哀傷の涙不堪。拭あくまで。小厮ホとりふ共ふ。彼亡骸を引あげて。竊ふ宿所へ扛ひくこ。次の日棺とて。のくこ。白木の法輪寺へ葬まつりぬ。武ふ。渚平ハ女房ふ。小厮ホ紙ア長へ女児が日来ひつるふ。ゆくるこ。ふ。斧丈八ハ目上の痛ふ。ちる駒をやく結果ふ。後ふ。ちりふ。更ふ。渚平紙怒ふ。支を紀さんとする按計あまで。忽地ふ。ところ出ふ。すぐ。晩ゆくまでや。世度の不幸ハ。ちぐく。尾花親子が仕価ふ。ところ。謀計ふ。定ふ。件の親子ハ。を。濡まで。養女をとりくさまでる。怒紙ふ。やくを。復せ。ところ。びくふ。ものあり。さまでありぬべきなりぬぞや。と。真ふ。ふ。告ふ。渚平ハ。を紙ふ。あくぬ。川のむこへと。疾視く。罵ると。限なく。ぬ。ふ。

と敷園ども流石よいゆゑなく面り。情なく散をゞ紀正し紀澄据るれとなるとゞいふ
がひなくく見送りぬ。案下某生再視復塚なる岐郷にその日女房澳水ども
つゝ竟に索こゝびく。下ゝび宿所へかゝりしかども流石なるとゝひ棄ゞくて
日くるくくろ只もとり。孤子棒ゝ引提蕉火とゝりてゝ。
復塚川と彼此と妻の往方を索るふ川上より堰下も秋水
高く岸ゝ拂ふく。備ことく凄ゞけゝび縦この波よ
投むとも久く漂ふべうをあらもと已るんくと
むとろごとくとゝくんとゝる折ゝ。交中の
月さゝ昇て隈ゝ照らも水際ゝ添て浮つ
沈つ流るゝものあり。吐嗟とゝんもゝび女子ゝるゝ衣の
色さえゝ似くもゝび雑て孤子棒ゝかけ留め。辛く川原へ引あげて

まゞこの夜し色と又るゝ黄猴ゝ染ゝ色八丈絹の袿ゝ被ゝり。原来
澳水ゝ嫉妬ゝ似る怪ゞ。扨ゝ〳〵くゝろまゝ。おのゞ衣ゝ脱棄ゝこの袿ゝて
身を投ゝり。水ゝ入ゝる時ゝ浮ゝ。繹彩離ゝるゝゞ救ふゝるゝ色淺ゝ
ゝるゝ去ゝけゝと更ゝ慚ゝ白物の後悔ゝくゝよその詮ゝるゝゞ人の性ゝ素善
なり。夫婦の滅顕ゝくゝ涙ゝとゝもゝ子嬰ゝ孤ゝ
ゝ揚ゝ熟視ゝゞゝいゝ。澳水ゝ
そゝゝの空のゝ瞻ゝゝたゝ主の女兒のゝ駒ゝ。ゝひゞけゝ紀ゝゝゝゝ
驚ゝ。ゝくゝゞ怪ゝ。ゝゝゝゝゝ現ゝ紀ゝゝゝゝ人ゝ。玉の緒ゝ絶の一丈。
ゝゞ滅心の及ん復保難ゝゞ萬ゝ。甦生ゝゝゝゝゝゝ吁ゝゝゝ。
哀傷ゝ周章ゝ澳水ゝゝゝゝ百倍ゝく。ゝゝゝゝゝゝ

仮うれ正為しまず宿所へと扛りて還り。骸を地炕のわとりふれさせて文やく
りく煖をべ中脘より陽氣復して寸口の脈あるが如。原来死るべきにあらず。
氣温るふすとてあるべくもあらずと。弥念ありとある舊衣式上下ろうこと
かさ被。こぶ虐ざりくゆくゆる。巣籠る雛と通霄心を竭して勤る程よその曉
ごとりに息かよひて。春の虫に蠢くべく。次の日甦生ありしかば岐義公死よ
欲びく。湯劑自粥何くれとかく。夜よ日よ看病懈らざ。かくてぞお駒(勢)ふ
ことよりくく。枕方る。岐義をうえうまくいくく渡ず。たちふずを消をてる。
縁由を尋ねば。岐義ハこぶ人漁水ぐく式委細よ告ぐ。さそいこ。念力ハ
岩式徹せど。主と親の稍行東よ。九石の弓を弯ふ。ちん方を憂よ
拯ぐ。こと。西名刀を投ひえんいと痛ず式心操仇ようぞ。親方ふ
紛りと式口づくくて宜ふ。謎こうけく見ぐ往。沸くくぬ式の底をあさえ交

ふ人を。ひとのうを岐義せよ。彼うを岐義せよ。岐義く。とうまくくと。
うけらを通毎よ。項筋忽地武者戦慄身の中解ふ似くをどを敵ふ皆を
こをざり式。嗚呼物体りや。こぶるよ。主の女兒のれるづく。餓ょ膳供ふ
是未曾有の口果報いで賞美せざ式。ぐ式ふ拙くく面よ慚ぐ。ふ憐て
嚔氣よを漬ぐくん音式出さどこを。ふをを匿とうべどを穏よあくふまて面目
うる。大ぐく人よちくをとくろ。さをぐ安でハあふくくと已。今霄ふくふ式律くて。
逐電せよ。とあん月ぐ王章。丈八をりく八丈の袿を贈アをひとくく上式下へと
返をいそくさ。竊よ准ふくく。その疾ふ暗号を結よかひなく。ふれかん月
律ぐ。部母よ伴ふ田舎へ還をべそぐまふ稱き比くく云居。女房漁北式
拾ぐ著ら。を母ハ坂東巡礼の行脚の隊よ入佛支長死旅寝よ。
とくくその夜よ後をくくハ小川へ脱くくるくくなく。ん月ふいひくく伴

あらぶるこころふかく腹のくろまく小女房漁水式打罵り。日毎の夫婦闘諍の騒
跳く四鄰を聞せ播盆狂く粉こ小。碎けく抜式ちひ自ひなる漁水を好きよ
姫ざりくん彼八丈の袿式被く。御国を生て往方ちまてどり〳〵入水ちまつ
らんと渚攫る疾川ま不思議の獲りの。正く〳〵恩〳〵夜の色妻うとうんまて
おもひきや。恋〳〵式君ぐ在んとこ尾式捨くまる式捨ひ。細魚式細くく
鯛を獲くる。熟びく言の葉ま漁るとと盡〳〵ぐ比かくて夜ま日小療難乃
丹精竟ま空〳〵ぐ家小〳〵く甦生ちまぶ歎びふちぐめまくく。
一生涯の孝式ぐこのとぐ式ま極めくこりぐさをありぬぐ。ちるなる恋〳〵式君ま
ありくたべと妻くり拝〳〵因果塚。忘れんとちくべいとでちく。忘れぐ式
刃の因果切るを只刃の因果因果を救ひせまへと祈る〳〵誠ま鬼神も
感應。その導まありざりせば海境の骨ありるれあひぐ式ちく刃小端ちく

ちくあちん自りく御ぐ隙の風杵式枕ま葬家の。秋乃弱脚蚊いぶ世くとを。
情部とりろ共ま。あ〳〵ちりぐちるるくりめ娘〳〵うくさまちまま。
艶治圓る因式糸小〳〵ちひぐけるる式のくり式日猥ま天今更ま。的小
直ま呆まちる数回嘆息〳〵。原来猩々ちる丈八ぶ彼とりくる式欺詐久奸謀
丁そおそ式けまとりるちる。才三のゆく贈まゆる艶簡と袿式ぐ〳〵。
岐鄰いくまくび迷ひく。樗式比りく云号〳〵。妻小をいく抜式ちりいせ。その
存亡の定るるくりぐといふ実夏であくんるんさそるるくりく式怒くくん。
とふちくくゆを女子ぐり。世ま罪おり式めふ臣数生く又天ま。憂ぶうく
なる憂くりの。ちるくりなる式ふ過世くさ。ちひゆくり悪業ま只白地ま縁由を。
喩さび岐鄰が惑ひを解くとちひ。おりぐ貝式技ひ色ま貴賤の差別ま
まび。道るくりぐくいくり式。くち腹立てく外るふあく孫と猜式照らし

よくもこゝよ。南宮祭の王は皇或は落蹶の弄ともいふものよ。よく似さるに男兒ならば女子ぶ勢想なる物ゝ。とゝかぶそたゝこ小憂こ者く。抱いひつるゝオ二の妙へ密の使をさせん為共つゝ走らんとて誓ひの書ゝ。袖殘こえて贈りゝ。みるゝ丈八ぶ欺詭ゝ。ゝゝゝぶ意へそなゝゝあゝゝぶ。是へ彩。彼へ彩。殘喻ゝ。ゝ殘伊のあへゝそゝ今ゝ小情臣ゝ。ゝめへとゝをゝゝをゝ尾荒刀称へゝ刀へとゝゝゝゝぶ。異妻を娶ゝ。ゝの紙怨ゝゝゝゝゝ墓ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ正ゝく吾倩とゝゝ共ゝ走ゝんと誓ひゝ。筆の迹ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝこゝ妻を棄て。他ゝ殘ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ不思議ゝ必死を救ひ進ゝゝゝゝゝゝ妹伊がゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

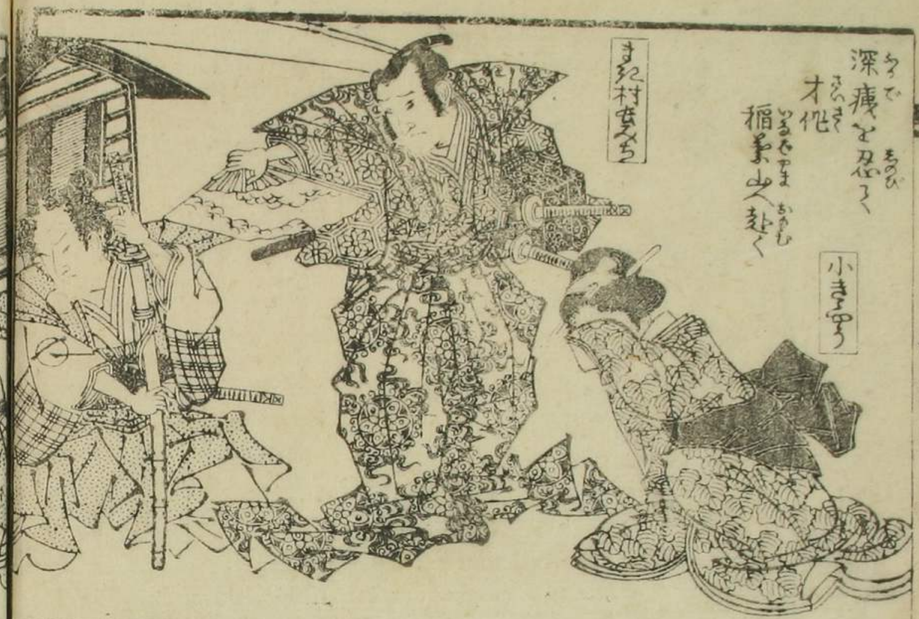
値偶の誠仇を受るべくもあらざりけるまでこそ。
とやせまし。かくやせまし。と決られず。王昭君が胡地に帰げる心地して。初は嫌しい。
中は疑ひ。後は情に霸されて。思いろとなく。牡鹿鳴小疾の食を共にして。
墓ろく枕をならべ。岐路は不見の神浮世心蕩けて。恍惚と球を弄ぶ
獅子のごく。天蓼に仗る猫児の如く。お駒が自のうるめ暮〳〵。つゝ人乃
幾をいろ。是をや媚を惹といふ。蜻蛉の驗歟。あやしくもうつゝ死夫婦乃情
縁〳〵不顕尾花才佗は。お駒を諸平にうつゝ。地ぢうなく妻の兄牧村牛之丞
長通に訪ひつゝ。頻に婚縁をのゝしる。そゞ女児治駒を迎ひとりて才三郎に
妻せろ。素より治駒は容止の儔罕なるのみならず。心ざまいと怜悧。
長通は十八郡の主に仕へて諸司の長ろ。その刃は深窓に艱ひて薪炊の
事に疎ろ。けれども才三郎が妻になりてより。女の童ども使ひ。よく阿諂乃

ところ。弦知りて。その進止正首をとゝ弦のゝ才佗小桔梗は渠はお駒に
ゝりとて。憂慈むこと大ゝなるに。さきだつ妹伏の親淫を親乃ゝ
一トしわすれて。偕老の契に濃やかなるに。かゝる泡に秘をなやまし。一旬足らずして
暮ゆく月。お駒は憂に沈まれて。実れ小川へ投るは風なかれ。
尾花親子は今夫ふ。その薄命を悼みて。ともに憂に堪へず。
招ひて。径を流せ非時を備へ。才佗は茶一ゝ弦いひ出て。袖を湯せ。治
駒は駒が心操弦。ひやりつゝ慰めろ。ゝ共に泣ゝ。治郎に稲業ゝ。
治駒が父牧村長通。ゝ使をして来臨せり。當下長通は後者ホが卑居る。轎
子をとゝとゝ出て。尾花親子に償せ。殘て客房に入りしに。小桔梗治駒を
迎へて。長途を労ひ。恙なきを祝し。才佗は茶一ゝ守の命弦清冽へ長通扇を膝に
推立和歌不思議に獲ゝ。稲業山の硯のゝ。時宜をとゝ仰ぐ。

守殊更に愛させ給ひ件の硯は當初ゆ[illegible]道三君いと昔[illegible]りの宝を守宙の重器風流の奇品にて[illegible]才能[illegible]を獲て[illegible]弄るに人と器と相応せり[illegible]その硯を進ぜよ[illegible]の詠びに才能と才三郎に對面せん因縁の[illegible]汝いかに[illegible]硯とも彼が親子を招くまでと仰ありつる[illegible]到著[illegible]速に見[illegible]准後[illegible]と言嚴に叙[illegible]才能達ぐ業に某硯を獲つる[illegible]小桔梗が[illegible]舊の[illegible]返せといひ或は守[illegible]進ぜよと勸[illegible]岩[illegible]おそろしく婦女子の常情故なく守[illegible]敵[illegible]孰ろ媚るといふ[illegible]ごとく[illegible]黙止せ[illegible]おもひ[illegible]家臣[illegible]和殿[illegible]硯と[illegible]親子が見[illegible]許さ[illegible]寔に[illegible]面目の硯は年来書齋に秘置日々毎に愛翫せ[illegible]もし使の展擒に倚[illegible]べしと[illegible]才三郎[illegible]書齋に[illegible]袋戸の鎖[illegible]硯の[illegible]牧村に遍与せ[illegible]長通[illegible]紐と

釋[illegible]傷に擬遺[illegible]服紗を開くに硯は[illegible]ふと[illegible]ぬ[illegible]推向[illegible]尾花親子は[illegible]光景に驚き呆れて高[illegible]注に小桔梗佐駒も忙然と[illegible]才能は硯の[illegible]引[illegible]袋戸に鎖を固し女房世話[illegible]女房は[illegible]年来秘蔵[illegible]に某[illegible]一夜の中に失[illegible]申譯[illegible]厄難[illegible]顧に案内知る癖者暗[illegible]硯を盗[illegible]舊の[illegible]不審[illegible]良人の自[illegible]小桔梗を活駒も共に硯の往方に親[illegible]書架書案隈[illegible]渋[illegible]才三郎[illegible]

擽て。怒地小膝弐撲地と戯やひあらさるとてそのとき私とりどちつてひと取く。
忙しく外面へ走去ん〳〵〳〵とうべ〳〵ふ烈しく喚とぶやをと孩児不覚こゝの期な
及ばく何処へゆ。ゆ使へ乳へ狼狽うやと叱さまぶ才三郎へつく〳〵と舊のゆく
立ちつゝ大人暁下まふ〳〵ぶ。此度も駒が狂死のゆ養家弐墓やる紀ゆとて
そゞ又渚平ゆるゝを吾们弐いつく恨ゝく。罵るゝ甚〳〵と苦流街道ゆるとあり。
匹夫ハ素よりの道理ゆ暗〳〵。亦案内ハ〳〵知ゆ。ゆ。ゆ。



深痍を忍ぶく
才仏
稲葉山へ赴く

あらぬ命欲と。支音ゆゑかゝ母女房を。禁めゝ絡さる。才三郎ハ落る涙を捕拉ひ。ゝ推量ゝ違ゝどゝ父の仇人の清平ゝ。視もゝどゝゝ復。然紙報ゝでゝハゝゝえ。死ゝゝを事の果ゝ死ゝ。早りゝハ物体ゝ。噛家ゝ大人。半はゝく浅痍ゝゝ。ゝゝゝ雄ゝゝゝゝゝゝゝ才仏眼と。睨ゝ。疎ゝゝ才三郎。救ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ

怪しいる今までを絶くなりし硯は正く。この石の内にあり。と言へば。
そは実の秋と夫子夫婦。えまび硯云ふ。あるこまるく。とだろう小教ゝ。さと
良しとふ。ふ疑ひは釋ざりしころ中小小桔梗の間に涙を推抜ひいと深き
なる女子の智恵ぬてこそ。ろ恨ぶ。原この硯乃生所恨ひ。
尾山の塚乃鬼。千司坊が若。名をいと惜しと世よろこびあれば。
今この硯の失くろこと。せとまび供ふ自滅さ。せ又は硯と見わ。せ。ふ塚恨
犯ゝく壇恨取り。硯恨ぶり。とそ。ぬとろ。鬼は怒て今かる。出来ふ。ふ
そやとの。ふ衆皆疑の解て人手死あるとの博して理小暗ふ。
人は亦神の情を小逼ふとふ。古人の祇口づゝ。境ぬ。ふこと。ありしぬ。その男れ
うは禍鬼の。かる歎死はもひきりけど。妻の涙と子の涙も。汎聽ぬ。ぬ。
あふとやや過世の悪業欲犯せ。塚の名よる負ふ。殘る妻子の因果欲ふ。

ふ。恨ぶ返せと。妻はさふふ。子を世ぬとふ。
才代は恨ぶ恨。左右恨信と。ふふふて。哪言ぶはき女だふ。千遍悔とと。その甲斐
あふふ。硯給失せざりしば。疾負ふふと。ふ使とふ。共ふ君所へ。ふふふ才
三郎を見。ふの准侍とふ。せ。ぬ。ぬ。まづ疾恨と刀と抜捨。ふふ。財恨推折ふと。
貴ふ恨恨左右ふ。布ふく。楚と。裴ふ。ふ長通ふ。ふ恨ふ。通い尾花氏勇
ふは誰ぬかゝふ。ふふ。ふ。ふ。

晴衣裳晴衣裳袖の露ぞまがなる長月の濡て朽葉の色ぞまがなる長月

通稲荷山の祝の巫女紙を結びて小脇に抱き。こゞ轎子へオ仙と扶乗せ。

オ三郎に父の傷に附そゝろ。と哀嘯きぶ。と妻と世婦ぶ。ぶ。と別

離の涙にむせ。とかくや彩平の。ぶかなとゝるく小出。くあるべへこゝに立

ゝ出ぬ。ぶ。山賊死仮。ぶ。つゝ。ゝ。ぶ。ゝ。ぶ。ゝ。ぶ

あるじハ崇式おそれて、翌ハ尾山の窆(葬)を返さんといふて、究竟のさゝなる
ものまづ斧を揮ひて、ちゝ共を彼処(起き)矢庭にあるじ式窆(突)落しとく
結果塚の鬼神崇りて、ちゝ共、命絶潰ぬ。といふと、ハ誰ら又ぶれこそ式嘆
ぶれ。ものまでよまと捷径ぶ。と縛十二分小伎倆ゐる。穏て斧を耳語ゐて斧を
大弘ぶ敬ひて。さて良人ゐいふ。因果塚ハその名ゐるくゝ。ちゝざるめを行ふ
移どかゐる伎宜のなり。せび女子ハ竟を詣ぶ。ものを共をもちぶやとゐ行ふ。
就てハ丈ハを俱。ゆへ。つ式ゐるき小廝ぶ。ゐるくゆゐる伎ゐるくゝ。こいゐ式諸
乎ハ疑ぶど愉くうけ引く。清朝丈ハを彼就を脊負せ一個の小廝を割鞍と
擔せ廻斧式ぶく。主後四人ゐ洛尾山へぞ登ゐるが、くてゝゐ因果塚のもとゐ
近く来ゐるとび諸乎ハ斧ゐゐ共を窆の前を晩生心中の祈式念ぶ丈
ハを脊負せゐるハ貫百の銭をそびきく。坎の中へをとゐを丈ハ竊を歎びて。